

諸井先生を偲んで

檜田 信男

諸井勝之助先生の専門分野が原価計算・管理会計・経営財務（会計研究学会の統一論題の区分では第二会場）であるのに対し私は監査論（同第三会場）で特に財務諸表監査や内部監査の問題に関心を持ち続けていたことから、当時の所属大学が異なることもあり、先生からお声をかけていただく機会はありませんでした。企業経営協会で役職についていましたが事務局員が先生との間に介在し私は先生と直接にお電話をすることもありませんでした。したがって先生のお近くでお教えいただくようになったのは、LEC 会計大学院で講義を持たせていただくようになってからでした。

先生から「戦友」（先生は多くの方々が御存知のように第2次大戦中海軍に応召され任官されていましたが、その経験から生死の境を共有する親密な関係を有する人との関係という感じで先生のお言葉を私はお聞きしていました。）といわれるような親密感を持たせていただけるようになるまでの間を、今ここに追憶するにあたっても限られたわずかの期間に限定したものに基づかざるを得ませんが、私にとっては大きな遺産と称すべきものをいただいたということで私自身の追憶を含め、述べさせてあげたいと思っています。これを想うとき本当に先生に感謝の念を禁じ得ません。

これについて少し触れさせていただきます。ときは相当にさかのぼるのですが、天野貞祐

先生著作の「カントの哲学」（私の郷里の家で使っていた本棚においたままにして上京し、その後に兄の家族が生活し、さらにリフォームするなどのことがあり現在は所在不明かと思いますが、定かではありません。なにせ、70年近くの月日が流れているのですから）に昭和24年頃たまたま書店で目に触れ、そこでは、個人の主体的判断が尊重されるべきこと、そして会議においても個人の意見を軽視ないし無視しないようにと説明されていたことがありました。これが念頭にあり、それは結論を急がなくてはならない通常の会議では不可能ではないのか、また規則に拘束されての業務の遂行過程では著しく困難ではないかとの考えが私の脳裏から離れることがありませんでした。後日早大に入学することになり哲学を受講した時のテキストはシュベグラの「西洋哲学史」でしたがそれによってでも念頭にあった疑念は晴れることありませんでしたし、また教員となり年数を重ねるに従い大学院の研究科委員会の会議とか学会の報告会場等で司会の立場に立つに従い、その不可能ではないかというカントに対する疑問は「不可能」というよう断定的に私にとってなっていました。したがって、多数決によって決定することを当然のように重視したり、また少数意見ないし個人的意見を無視ないし軽視し、より早く結論を引き出すきらいが私にはありました。

しかしながら、LEC 会計大学院の研究科委

員会に出席するようになり、諸井先生が研究科科長として教授会を運営するようになって、それまでの私の断定的な確信もだんだんと揺らいでこざるを得ませんでした。というのは、先生は、研究科長として議案を提案し、教授会メンバーから意見を徴するにあたって、私のそれまでのあり方と全く違うものでした。もっとも、LEC 会計大学院の構成員数は、私が比較的長年月つとめていた中大の大学院構成員が商学研究科で60名を超えていたかと思いますが、それと比較し10名程度でしたから、少人数で各教員の考え方を引き出しやすい環境にあったということもできます。

しかし、LEC 会計大学院は、実務経験を大学院教員としての資格を判定する基礎にするいわゆる「実務家教員」が半数近くに達していましたので、理解を共有することに非常に難しい条件があったといえます。日中いろいろな条件下で勤務しその仕事が終えて後に大学院に入学し、日中の仕事の掘り下げをするとか、あるいは会計学を勉強しなおして国家試験受験の基礎を固めるとか、それぞれ目的があって大学院に入学してきている学生諸君には、その目的がいずれであるにしても、大学院での理論的研究が基礎にあることを理解していただくことが大切という考え方がベースになっていたかと考えます。大学院での単位取得者に国家試験である種の便宜を与えるのもそのような考えによるものと理解しています

会議に種々の提案があり、それを審議するのに、諸井先生は、会計専門職大学院の理念を念頭におきながらは、教員間相互の実務的

対話を巧みに利用しながら、じっとお聞きになって会議を遮ることもなく、会議を進行されておりましたが、このときに私の脳裏にあったのは、敗戦直後の食糧不足の頃に書店でめぐり合わせたカントの本に関する疑問でした。最初は諸井先生の会議の進行に不満もありましたが、回を重ねるに応じ、この進行のあり方の正しさを納得できるようになりました。

それには、会議の進行にあたる当事者が、会議の案件にあらかじめ広い視野からしかも深い洞察をしておくことが求められ、それをすればする程は進行当事者はとかく自ら調べたことについての思い込みが強くなるきらいがあるのですが、それを抑え決して自らの意見をあらかじめ述べることなく、先ず聞く立場に立って静かに発言内容について考察することが求められるのでありましょう。諸井先生は、発言の内容を発言者が落ち着いて説明できるようにゆっくりとした口調で質問され驚くほど黙って聞いておられました。

私もこれまで会議の司会者の立場に就くことが多かったのですが諸井先生のようにはできませんでした。今になって至らない自分に反省しています。これから司会者の立場に立つことがないかもしれませんが、もしも司会者の立場に立った時にはこの反省を踏まえてより多くの人に納得されるような結論を引き出せるように職責を果たしてゆきたいと考えております。

最後になりましたが諸井先生誠に有難うございました。御冥福をお祈り申し上げます。